

有馬氏を含めたお姉様方は「妹は守るべき存在・困らされたことはない・親に妹の将来を託されたりしていない」と話され、素敵な家庭で育てられたのだなと思いました。

しかし、結婚や人生の節目での選択に伴う葛藤はあったそうです。有馬氏はその経験からきょうだい支援に取り組んでこられ、周りも自分も気付いていない「見えない鎖をほどく」ことで姉妹それぞれの人生があると分かったそうです。

「親は半生、きょうだいは一生」と言われる障がい当事者との関わりについて、きょうだいはどのように思っているのか、きょうだい支援に望むこと等を学ぶ機会になりました。

最後に本人大会決議案、大会決議案が読み上げられ、次期開催地である大阪市育成会長谷川理事長が来年の参加を呼びかけて閉会となりました。

### 【次期開催地の大阪市育成会／長谷川理事長の挨拶】



### 韓国から視察団がお見えになりました

副理事長 兼 事業統括 上宮 俊一

11月10日に韓国障害者の親ネットワーク(KPNPD: Korean Parents' Network for the People with Disabilities)の皆様23名が法人事務局にお見えになり、意見交換を行いました。KPNPDはソウルを本拠地に置く、知的・発達障がいのある子どもを持つ母親を中心とした団体で、支部160、個人会員1.5万人の団体です。

活動内容は、①障がいのある子ども、大人の社会参加、権利行使のための擁護、②障がいのある人が自身の利益のために声をあげるセルフ・アドボカシーグループの組織化、③韓国全域のネットワークを通じた支援制度の向上、家族を繋げ、地域コミュニティを活性

化して、公共政策へ関与すること、④障がいのある子ども、大人への差別・偏見と闘い、政策によって人権を守ることを掲げており、特に政府要望による新たな政策の実現に注力されているようです。

驚いたのは、政府要望のためにKPNPDの代表が64日間の断食を行ったり、男女問わず剃髪し、仏教の最高の敬礼とされる「五体投地(両ひざ・両ひじを地に着けて伏し、さらに合掌して頭を地につける)」により、地方からソウルまで何百キロもデモ行進するといった、命がけの行為も辞さない気迫に満ちた行動です。

韓国も日本と同様、施設入所者の地域移行が大きな課題となっているようです。障がい者の権利に関する国連からの勧告として、「韓国と日本の入所施設はナチスの収容所のような」と指摘されたそうです。地域移行に関しては、日本的感覚ではかなり手厚い支援を想定されており、金銭面を管理する専門家、言語の専門家、直接支援の専門家など利用者に対する多面的な支援体制、チームワークの構築を目指しておられるということでした。

また、日本の障がい児施設の地域移行は進んでいるとは言えない状況ですが、韓国では何らかの事情があり両親と同居できなくなった、障がい児のためのグループホームもあるようです。

さらに日本と同様、強度行動障がいのある人への支援も喫緊の課題と位置付けられており、現在制度化に向けた運動を続けておられます。日本の強度行動障がいのある人への支援体制についても多くの質問があり、関心の高さがうかがえました。

約2時間程度の話し合いでしたが、熱気あふれる雰囲気なかで、質疑応答が途切れることもない、実りある機会でした。今後も海外の団体との接点を大切に、障がいのある人の生活の質の向上について意見交換をしていきたいと思えます。

### 【韓国障害者の親ネットワーク(KPNPD)の皆様と】

